

スペインで考えたこと  
—林明夫の視察シリーズⅡ—

開倫塾  
塾長 林 明夫

## 1. はじめに

「ラテン気質」のスペイン人は、遊ぶことのみ大好きで、仕事をすることは大嫌い。昼は長く休み、夜ふかしが大好き。

以上のようなことをたびたび聞かされ、だからスペインやラテン系の国々が貧しく、また、失業者も多いと思う方が多いと言われているようです。果たして、本当にそうなのか。

今回は、「視察シリーズ」の第2回目で、スペインからの報告です。

## 2. 「普通の国」になりつつあるスペイン

①スペインの首都マドリッドの郊外は、現在、いわゆる「ニュータウン」の建設ラッシュ。整然と都市計画をされた「ニュータウン」の中に、ショッピング・センター、学校、病院、商店街、アパートや一戸建の住宅が、数多くつくられつつあります。

友人の医師マルガリータさんの家を訪れると、弟夫婦と両親夫婦との2世帯住宅で、シンメトリー(左右対称)のプール付の住宅。地階がガレージ兼仕事場、1階は応接室、台所とテラスに続く居間。2階は4ベッドルーム。3階は左右に大きな窓とサンルーフの二つ付いた屋根裏部屋。片方の家だけでも、トイレが6ヵ所も付いた行き届いた設計。「ホー」とため息が出てしまいました。

こんな家が街中いたるところに見られるのが、最近出来つつあるニュータウンのようです。

②マドリッドの国際便の飛行場は、午前7時すぎには免税店もすべてオープン。「ここはシンガポールか」と感違いするほど数多くの真新しい免税店がブランド品を山のようにとりそろえて観光客を待っていました。

少し大きな街には、スーパーマーケットがあり、「シェスタ」と呼ばれる昼休みの時間も気にせずオープン。買い物客でにぎわっていました。

③マドリッドからセルビアまでは、日本の新幹線よりも速くて、はるかに乗り心地のよい『AVE』が、時刻通り発車し、時刻通り到着。何回も乗ったバスや列車も、定刻ピシヤリと出発し、列車は定刻ピシヤリ、バスも必ず目的地に4～5分前には到着。日本の鉄道やバスと時間の正確さでは全く変わりありませんでした。

駅のデザインや色使い、列車の色使いは、さすがピカソや数多くの芸術家の出た国とあって、斬新で、美的感覚にあふれたものでした。日本の交通機関も学ぶところ大であると思いました。

④以前は日本人でスリや泥棒に会わない人はラッキーだ、と言われたスペインですが、最近は北アフリカからの出かせぎの人々を締め出しているため、治安が大幅に向上。用心にこしたことはないが、かなり安心して旅行できる国にスペインもなった、と評判になるほど。

⑤街の景観、特に歴史的な建物を保存しようという執念は、尊敬に値します。中世の三つの大学の一つに数えられる「サラマンカ大学」を訪れた時は、このゴシック建築の教会や、その続きの建物がサラマンカ大学だと言われ、一体どこで勉強するのかと不思議な思いをしましたが、中に入って、日本やアメリカのどこにでもあるような教室や事務室があるのに感激した。要は、外側をそっくり残し、内側だけ使いやすいうように現代的にしているのです。全て壊し、全て新しくするのが日本の方法だが、屋根も含めて外側は全て残し、内側を全て変えるのがスペインのやり方。あちこちで随分とこの方法を見ました。

\*歴史的な建築物の保存について興味のある方は、スペインの国営ホテル・チェーンである「パラドール」の会員になり、「サモウ」「トレド」「レオン」など各地の「パラドール」に宿泊することをおすすめします。教会や修道院・古城をホテルとして活用しているからです。景観や、歴史的な建物を生かした建築に興味のある方も、一度はスペインに行かれると、これまた目が開かれるかもしれません。

街の色を一つのトーンでまとめると、これほど美しくなるのかという一つのモデルがスペインにもあります。

⑥「あなたは何をやっていますか」と聞かれたので、「日本で学習塾といわれるものを行っています。生徒は去年のピークの時で 3175 名いました。今年の春には、21 名の先生を採用しています。職員は全部で 150 名余りいます」と説明すると、「そんなに人を雇っている経営者なら、それだけですばらしい。あなたのような人がこの街にもう 10 名もいたら、この街の経営はもっともっとよくなる。失業者も減る」と言われました。24%の失業率までいったスペインでは、自分の就きたい仕事に就くことが困難な場合が多いようです。

先日亡くなった鄧小平氏が、91 年に上海で行った「黒いネコも白いネコもネズミをとるネコはみんなよいネコ」という演説を、現代スペインにおきかえると、「どんな会社でも(社長さんでも)、人を採用する会社(社長さん)はよい会社(社長さん)」となるようです。

⑦今回のスペイン視察の最大の目標は、産業の空洞化、産業構造の大転換が迫られる日本、とりわけ大工業地帯である北関東にとり、125 円になっても超円高と世界最高水準の賃金のもとで、失業問題は避けて通れないと考えるので、失業率が 20%を超えて久しいスペインは、一体何が原因で高失業率の国になってしまったのか、それに対しどのような短期的な取り組みと長期的な取り組みを国と個人はしているのか、更には、自分の仕事である教育サービス業はどうなっているのか、高失業率の国でも盛んなサービス業は何なのか、などを考えるきっかけを得るためでした。

問題が大きく、また広いので 1 回や 2 回の視察ではとても結論を出せるようなことではないと思うが、これからもスペインを「ベンチ・マーキング」し続け、「①継続的なデータターの集積と②科学的な思考を駆使した観察から分析へ、そして判断を下すという思考手順、この二つの経験を積み重ね」(注 1)ることにより、テーマに迫ろうと思います。

⑧ただ、大雑把に言えることは、こと失業問題だけについていえば、あの独裁者といわれるフランコ氏の時はよかったけれども、その後の政治的な混乱、とりわけ産業政策にうかつした政権のおかげで失業に苦しむ人が多く出たこと。最近では、EU 諸国と同じ仕事ぶりをしないとありとあらゆるところで遅れをとり、またサービスや治安が悪いとドイツやアメリカからの観光客も来てくれないので、政府や産業界が中心となって仕事の質的向上に全力で取り組んでいるようです。これに 99 年の欧州通貨統合にむけて、インフレ率や失業率を低め国の力を強くしようというスペイン始まって以来の努力が少しずつ実り、バルセロナ市郊外のニュータウン建設

ラッシュや朝早くから始まる免税店、シェスタのないショッピングセンター、時間に正確な電車やバス、どろぼうやスリの減った街中が実現しつつあると思います。

大事なことは、政治や社会のトップに立つ人が、高い目標を掲げて人々を引っ張り続けること。その目標が人々の日々の生活を良くすること、国の力を高めることにつながると思ったらみんなで協力することではないかと思います。

- ⑨過日、「栃木県経済同友会国際問題委員会日米欧部会」で会の委員長である板橋敏夫足利商工会議所会頭から、「イタリアのコモ市の繊維産業」の隆盛ぶりをお聞きした。もし、足利市や両毛各市にとって「コモ市」が非常に参考になり、学ぶところが多いなら、商工会や商工会議所、市町村が街をあげて「コモ市」を「ベンチ・マーキング」させて頂き、取り入れるべき精神はどんどん取り入れさせてもらいたいと思います。

時代は光のようなスピードで進んでいます。世界中にアンテナを張りめぐらして、参考になるところがあれば、よいリーダーのもと、一丸となって視察に訪れ、積極的に取り入れる。ゴルフや趣味に使うお金とヒマがあったら 5 年後、4 年後の我が社と我が街のために視察に訪れることをおすすめします。

私も近いうちにぜひ訪れたいと思いますが、繊維関係の方で自分の会社や我が街の将来を本気で考える人は、自社の取り扱い分野を扱っているアジアの国のいくつかと、イタリアの「コモ市」を訪問し続けると「活路」を見い出せるかもしれない。日本は世界を相手にして仕事をしているのだから、地元にはばかりいて嘆いていても物事は一步も進まない。座して死を待つよりは、パスポートが出入国のハンコでいっぱいになるまで視察をし続けて下さい。

- ⑩失業者の多いスペインで人々が習いたいものは、「英語とコンピューター」でした。「英語とコンピューター」をマスターするビジネススクールは、ここスペインでも大はやりでした。21世紀を迎え、就職を勝ちとるためには、また、ビジネスを効率よく進めるためには、英語とコンピューターが手足のように使いこなせなければならないようです。

### 3. おまけ一本の御紹介

- ①「ストア・コンパリゾン(店舗見学のコツ)」渥美俊一・桜井多恵子共著、実務教育出版・平成 8 年 2 月 20 日刊 1800 円。

\*「視察の仕方」を省いた、おそらく日本で最初の体系書(テキスト・教科書)。店舗、つまりお店の見学に限らず、様々な視察にいくらかでも応用できる内容。故に、視察を職業にする人(市町村長、国会および地方議会議員、国家公務員、地方公務員、営利・非営利を問わず会社や団体の幹部職員、PTA や自治会で視察に行く人々等々)にも参考になります。

\*ただ一番参考になるのは、小売・卸・問屋・他の純料サービス業を問わず「サービス業」に従事している人です。「世界一になれた理由は、誰よりも店舗見学を数多くしているからだ」と世界一の小売業ウォル・マートの創業者サム・ウォルトン氏もおっしゃった、その店舗見学の具体的な方法が書かれています。私はこの渥美先生と桜井先生のお二人の先生を尊敬しているので、何十回もセミナーに出、本も何十冊も読ませていただきました。日本中で誰よりも多く、日本やアメリカの店舗視察をお続けなのが、このお二人ですので、視察をなさる方の必読書としておすすめ致します。

②注 1 は、この本の「まえがき(2)」XI からの引用です(桜井恵子著の部分です)。

③来月号は、「朝鮮民主主義人民共和国」からの報告の予定です。

\*スペインには、サラマンカ大学の視察も含めて、大学関係者と出かけてきました。